

東方斎・荒尾精の生涯

東亜同文書院大学四二期生 小崎昌業



京都熊野若王子での追悼式

二〇一〇年七月十八日（日）午前十一時より京都市熊野若王寺神社内の近衛篤磨公撰文による荒尾精先生の顕彰碑前において、東亜同文書院大学、霞山会、愛知大学の関係者二十数名が集まり、荒尾先生の追悼祭祀を行い、日清戦争九烈士碑に挨拶し、荒尾先生旧宅跡を訪問し、然る後社務所内部に移動して昼食をとった。その前日十七日よりコープ・イン京都において、東亜同文書院大学の資料展示会及び講演会が行われ、丁度祇園祭りの最中であったが、多くの来会者を得て盛会であった。荒尾先生の京都追悼式は、戦後暫くの間は、滬友会（東亜同文書院同窓会）が毎年実施していたが、今やその会員数も激減したので、今後の実施は霞山会（戦前の東亜同文会）、愛知大学にお願いせざるを得なくなった。

この機会に荒尾先生の生涯について以下の通りとりまとめることとした。

一、荒尾精と漢口樂善堂

荒尾精は明治維新後の新しい日中関係開拓の先駆者である。彼の大陸渡航は明治十九年、二十八歳の時であり、二十九年、三十八歳の若さでこの世を去った。その大陸における活躍は十年に満たなかったが、残した足跡は大きく、今も脈々と生き続けている。

(一) 荒尾精の略歴

荒尾は安政六年（一八五九）四月、尾張藩士義済の長男として生まれた。幼名一太郎、のちに義行、また精と改め、東方斎と号した。明治四年上京、菅井誠実家の書生となった。彼は、身体、頭脳、意志ともに強壮で、仏語、漢籍、剣道を学び、明治十一年陸軍教導団に入学、十三年陸士（旧五期）に入学、ここで一期先輩の根津一と相識り、終生刎頸の同志となった。十五年卒業、少尉に任官。翌年熊本に赴任。十八年参謀本部支那課に転任。漸く中国問題に近づく。十九年（一八八六）官命により現役のまま清国に派遣された。

(二) 漢口樂善堂の活動

荒尾が大陸に第一步を印し、上海の岸田吟香と初めて会ったのは、明治十九年四月、時に荒尾二十八歳、岸田五十歳。そこで岸田の全面的支持の約を取り付けた荒尾は、漢口に居を定め、樂善堂の看板を掲げ、上海より精錡水などの薬剤、書籍、雜貨を取り寄せ販売した。それは本業の任務である中国の実地調査の資金

を賄うためであった。荒尾の呼びかけに応えて、すでに中国各地を周遊していた志士たちが漢口に集まった。のちに日清貿易研究所・東亜同文会・東亜同文書院設立の支柱となる宗方小太郎・井手三郎ら三十余人である。荒尾の功績は、これら分散していた志士たちを一定の方針のもとに協力せしめたことである。楽善堂の白人の侵略を防ぎ、アジア人の提携によるアジアの復興を念とする根拠であった。

その頃北方よりのロシアの脅威、シベリア鉄道敷設計画が伝えられたことは、彼らに強い衝撃を与え、明治二十一年（一八八八）楽善堂は次のような活動方針を決定した。

① ロシアがシベリア鉄道により清国に勢力を伸張することを防遏する。

② 清朝は腐敗し、わが国を敵視す。故に同志は、漢民族を助けてその革命運動を助成し、遅くも十年以内に中国の改造を断行し、日中提携の実現を期する。

③ 東亜経綸の準備をして必要な人材を養成するために上海に学校を設立する。

④ ロシアの東侵を防ぐため、浦敬一を新疆伊犁方面に派遣する。

漢口楽善堂は支部を北京、重慶、長沙、天津、福州に開設し、各地のロシアの動きにも注目している。彼らは中国人と同じ辮髪をつけ、中国服をまとい、中国人大衆の中に入っていたが、外国人に対する強い反感と猜疑のなかで、交通不便、事情未詳の内地深く潜行し調査研究に当たった。

（三） 荒尾の帰朝復命書

荒尾は漢口に駐在すること三年、明治二十二年（一八八九）四月に帰朝したが、五月には駐在中に見聞・調査した資料・情報に基く六章、二万六千余字からなる復命書（報告書）を参謀本部に提出した。その大要

は次の通りである。

①清国の廟謨（国是）

アヘン戦争以来、清国は対外政策に力を入れ、国防・軍備を拡充し、近代化の面でも鉄道・通信の整備、経済、産業の開発に成果をあげている（北洋艦隊にもふれている）が、反面、「内治ハ実ニ腐敗ノ極ニ達シ……大厦ノ傾ク一木ノ能ク支フル所ニアラズ」と政治腐敗の実情を指摘している。

②内治の腐敗

清朝の最大欠患は少数の満州民族が多数の漢民族を支配しているところにある。そのため政治機構は複雑な二重構造をとり、漢滿両民族間の差別感、猜疑心を増長する。

特に官吏登用制度である科挙の弊害は甚だしく、貧官汚史の風は政權衰亡の最大原因であり、「私金ノ額ハ国庫収入額ノ三倍ニ上ルベシ」と指摘し、ひとたび革命起れば清朝の天下は保し難いと断じている。

③人物

漢人の高級官僚陣を批評し、いづれも保守派か西欧心酔派であり、皆老年であつて、今より十年を出ずして相竭きると警告している。

④兵事

専門家の立場から、戦法・武器・将兵・軍紀・編制の各般にわたり詳細を極める。国家予算の三分の二を投入し、兵器の近代化を急いでいるが、将兵に老齡者多く、軍紀の紊乱はその極に達していると指摘し

ている。

⑤ 欧州四大国の対清策

英・仏・独・露各国の対清侵略状況を具体的に記述している。

⑥ □□□□□□□□

前記各章の所論を総括して結論を述べたものであるが、日清貿易研究所の設立を献言している。ここでは日清両国が運命共同体であることを強調し、この清国に対し和親策をとるも実行は難しく、強攻策をとれば、短期戦で領土か賠償金を得んとしても各国の反対強く実現容易でなく、長期戦となれば我が国力を衰耗するのみにと予言している。最後に荒尾は、清朝内部において正々堂々政府打倒の義兵の決起を期待している。孫文がハワイで興中会を結成した五年前のことである。

(四) 荒尾の日清貿易研究所設立運動

荒尾は明治二十二年五月復命書を提出した後、二十三年九月日清貿易研究所を上海に設立するまでの間、対清貿易振興案である「日清貿易商会」の設立を主張した。

この構想は、まず上海に「日清貿易商会」なる一大商社を設け、清国二十五の開港場に支店を置いて相互に連携し、更に日本の各商工業者と連絡して両国貿易の振興を図ろうとするもので、その任に当たる者には最も適任者が必要とするため、別に日清貿易研究所なる附属研究所を附設して、ここで養成するといふものであった。

当時日清両国は通商条約を締結してから二十年近くなるが、貿易は遅々として進展せず、その貿易も殆ど清国人の手に握られていた。他方上海に進出している日本商社は三井洋行のほか数社にすぎず、交通面でも

日本郵船が横浜―上海間に週一回の航路を運航するに過ぎなかった。このような実状をふまえて、荒尾は、清国における我が商権を拡張し西欧諸国の経済的侵略に対抗し、日清両国の経済的提携によって共に富強を図り、東亜の防衛を達成しようとした。

荒尾の構想に同志根津一も賛同したので、荒尾は大いに確信を得、朝野各方面の遊説を開始したが、資金の調達は極めて困難であった。そこで「商会」の設立は後日に譲り、まず人材養成のための日清貿易研究所の設立に努力した。

この案は黒田首相以下の賛同を得たので、荒尾らは約一カ年全国を遊説して約三百名の応募者を集め、そのうちから百五十名を選抜することが出来た。うち公費生は石川・福岡両県のみで、他はすべて私費生であった。研究所の開設資金については、岩村農商務相が北海道の山林払い下げにより約十万円調達の見込みがついたが、同大臣が病に倒れ、この計画は水泡に帰した。窮地に陥った荒尾は急を川上参謀次長に訴え、漸く内閣機密費から四万円が支出されることになった。

(五) 研究所開設に根津の協力

かくて一行の渡航準備が整い始めた頃、漢口領事から外務省に対し、漢口樂善堂に残った青年らが、当時随所で蜂起していた農民暴動に投じ、武昌に浸入する動きがあるとの情報が伝えられ、外務省にはこの四万円交付を中止せよとの強硬論も現れた。事態を憂慮した外務当局は根津の出馬を要請、軍当局の特別の計らいもあって、根津は急遽漢口に向かった。この思わぬ事態が年来の念願であった根津の清国行きを実現させた。樂善堂の騒ぎは根津の説得で漸く平静を取り戻し、補助金問題も落着いた。

日清貿易研究所は二十三年九月に開設されたが、根津は同年十一月以来所長となり、資金調達等のため帰国不在となっていた荒尾に替わり、二十六年六月の閉所に至る三年間、実質上の所長として苦難の続いた研究所の運営に当たった。二十五年には大著『清国通商総覧』を編纂刊行した。

この研究所の経営が機縁となり、後年根津は東亜同文書院の院長となった。東亜同文書院は、根津によって、日清貿易研究所及び荒尾精とのつながりを持ったことになった。

二、日清貿易研究所の概要と経営状況

(一) 教育方針と学科

明治二十三年（一八九〇）九月三日、百五十名の学生と研究所職員、日清貿易商会関係の役員等合わせて約二百名に近い一行は、荒尾所長に引率され、横浜より出帆、九日に上海に着いた。研究所は競馬場の近くで、中国家屋十軒を三棟に改造接続したものであった。

開所に当たり、荒尾が示した研究所の「教育精神」、「教育要旨」と学科は次の如くであった。

(二) 教育の精神、（前略）島国狭小の池魚を転じて汪洋たる大陸の江湖に澆漚たらしめ、……公同協成の大局に通達せしめ、……忍耐力を強大ならしめ、重きを徳育に置くと雖も亦必ず厚く力を其の知育に致し、……縦い処を異にし事を同じくせざるあるも……先ず人情の近づき易き卑近の實際より入り、東洋の乾坤に誓つて特色の一新紀元を制し、静かに彼我均霑の福利を享有するに至らしめんとす。

(三) 教育の要旨、(前略) 教育は専ら日清間の貿易に資するの事項にあり。……夫れ信用なるものは……商業社会に在りては其の盛衰一に此に在り。……我が国将米の貿易を盛大にし、国家経済に資せんとせば、……務めて其の氣宇を汪洋濶大ならしめ、……剛毅不撓の性を具へしめざるべからず。生徒成業の後、……我国貿易の一大隆昌を計らんとせば、実業家をして能く相結合協力せしめざるべからず。……此の故に本所生徒の養成に於けるや、人自ら之を畏愛し、之に帰依する温良の性を発達せしめずんばあるべからず。(後略)

(四) 学科の概要

研究所の修学年限は三年で、その学制と教科は法規によつたものではなかったが、独自に「規則要綱」を設け、日本内地の高等教育機関にならっている。

更に「生徒心得」二十五カ条、「寄宿舎規則」四十四カ条を定め、厳しく学生の心得を規定している。特に生徒心得において「国際環境の中にあるので、……清国人は固より各国人に対しては、決して輕薄の動作を為すべからず」と戒しめている。

(五) 開設当初の経営難

① 運営資金の枯渇

荒尾は二十三年十一月政府の補助金受領交渉のため帰国し、漢口から根津を迎え、代理所長として後事を託した。政府は研究所に対する年間二万円の支出を内定していたが、当時開会された第一議会においては、野党より政府の財政政策を攻撃され、予算の大削減を強いられ、約束の補助金支出は実現出来なくなった。

②熱病の大流行

一方、開学早々から学生の間には氣候風土の変化と食事の不慣れにより、下痢患者が多数出た。また當時上海附近には湿地が多く、熱病が多発し、研究所も二百名近い職員、学生が殆ど羅病して、莫大な臨時出費を余儀なくされた。

③学生の動揺と刷新

研究所が荒尾から資金の早期調達不能の通知を受けたのは、二十三年の暮れのことであつた。幹部協議の結果、上海の商習慣に従つて、取りあえず向こう三ヶ月払いで迎春用品を買い込み、その補填は樂善堂の信用によつて多量の苧麻を購入、更に三井洋行の力を借りて荷為替を取り組み、現金に換えることで急場を切り抜けた。

このような財政窮迫の事態はいち早く学生等に察知され、過激分子と所長擁護派が対立、騒然とした状態になつた。荒尾は二十四年二月十五日東京から帰所し、学生一人ごとに会つて説得し、納得しない三十名の退学を命じて事態は一段落した。

これを機会に研究所経営の大改革を行うことになり、日清貿易商会関係の業務を廃して研究所一本にしたり、冗員を淘汰し、新たに教頭を迎え、人心の刷新を計り、研究所の運営は逐次軌道に乗った。

(六)『清国通商総覧』の刊行

研究所の課程は、三年間で一応の教科を終え、卒業後更に一年間商業の実践をさせた後実務を担当させる規定であつた。この実務につく機関が日清貿易商会であるが、これには多大の資金を要し、商会設立の計画

は延期の状態にあった。

そこで商会を設立するには、まず我が国事業家の眼を清国に向けさせる必要がある、それには清国に関する知識を普及し、その有望な所以を知らしめることが第一であった。そこで研究所は清国事情啓蒙の書として、『清国通商総覧』を刊行することとし、根津がその編纂を担当した。同書の基本資料になったのは、荒尾が漢口に居た明治十九年から二十二年に至る四年間に、荒尾の同志たちが、四百余州の山川荒野を命がけで跋涉した中国の奥地の実体報告であった。そこには「生きている中国」の姿があり、世界に中国の実像を紹介する最初の文献として高く評価されるものであった。

根津は代理所長として教務を統べるかたわら、この編纂に当たったが、五カ月余にわたるその身心の労苦は言葉に尽くせぬものがあった。その間樓上の書齋に閉じこもり、愛飲の酒すら断ち、食事は室内で鶏卵と牛乳ですまし、睡眠もきりつめ、辛酸を重ね、菊版二千余頁、全三巻の大冊を完成、二十五年八月に出版した。根津三十三歳の時であった。

同書は三編に分かれ、第一編では地勢・政治・財政・経済・交通運輸・金融・貿易更に商業組織、商慣習・中国渡航奥地旅行の心得に至るまで詳述され、第二編では工芸品・陸海各種の物産について細大もらさず記述されている。中国大百科辞典とも称すべきもので、これにより研究所の声価を大いに高めることが出来た。

(七) 学生の卒業と実習

しかし、日清貿易商会の設立は依然困難であったので、これに代わり「日清商品陳列所」を設けた。これは大阪の豪商の出資により設けられた。学生は二十六年六月に八十九名が卒業した。卒業生は引き続き商品

陳列所で実習に当たることになっていたが、多くが帰国し、実習に従事した者は約四十名であった。

二十七年八月、日清戦争が起こり、実習生は三十一日出航帰国し、研究所は一期生のみで、三カ年の短命に終わった。

三、荒尾の対清意見と早逝

二十六年に帰国した荒尾は、「東方通商協会」の創立などに奔走したが果たさず、二十七年八月に始まった日清戦争においては、京都若王寺に退居して後進の指導に務めるかたわら、戦後の処理策に想を凝らしていたが、十月『対清意見』を公表し、「戦後の締盟上、欠くべからざる三大要件」として、次の通り主張した。

第一、（前略）清国ヲシテ盟約セシメタル条約履行ノ担保トシテ、我が国ハ渤海ニ於ケル最要の某軍港ヲ預リ置クベシ。

第二、（前略）清国ノ鄙都人民一般ニ我方宣戦ノ大旨ヲ説明シ、之ヲシテ遍ク我が国ノ真意ヲ了解セシムベシ。

第三、（前略）従来通商上我方国ガ受ケタル不便不利ヲ一掃シ、欧米各国ニ比シテ更ニ優等親切ナル通商条約ヲ訂結スベシ。

第一は開戦の主眼である朝鮮の独立を確実ならしめる対策であるが、当時の世論であった領土割譲には賛

同せず、第二では当時では予想外の文化宣伝戦の構想を力説し、第三は最恵国約款がないため、開港場数・内地通行権・物品通過税賦課等につき、我が国が欧米各国に比して不利な扱いを受けているのを是正しようとしたものである。

当時連勝に意気揚った我が朝野は、領土の割譲を当然の講和条項としていたから、荒尾の領土割譲反対論は大いに論難攻撃された。そこで荒尾は二十八年三月、更に『対清弁妄』を公にし、極力領土割取論を排撃し、「環望する諸国は果たして袖手黙坐以て我が国の為すに任すべき乎」と三国干渉を予見し、「我国が領土割譲を求むるの時は、即ち列国が禹域分食の素志を行う」と清国の四分五裂を喝破し、やがてロシアの満州侵略となったこと世人周知の通りであり、ここに東亜問題における荒尾の精神的後継者ともいうべき近衛篤磨公の蹶起を必要とした。

日清講和条約成り、日本は賠償金と台湾を獲得したが、露・独・仏の三国干渉によって遼東半島は還付した。荒尾は二十九年山居を出て上海から新領土台湾に向かった。渡台早々内台人の関係融和を急務として、紳商協会の設立を提唱し、十月十九日その結成式を終えた。かくて台北を出発し南下しようとした時、はからずも病魔（ペスト）の冒すところとなり、十月三十日忽然として行年三十八の若さで世を去った。死に臨み、四十度を超える発熱にかかわらず、正座して客を招き、大に談論したが、口にするのは何れも東亜大局の事ばかりであったという。

荒尾の長逝から六年後の明治三十五年、京都若王寺の旧寓居に近く、友人・門弟らの手によって表彰碑が建てられ、冒頭に述べた通り現存する。二千数百字からなる碑文の撰は近衛篤磨、書は陝西省辦升允の筆になる。

四、東亜同文書院

東亜同文会が貴族院議長近衛篤磨公爵を中心に結成されたのは、明治三十一年（一八九八）十一月である。それは日清戦争から三年目、露・独・仏の三国干渉により、まさに荒尾が『対清弁妄』において、領土割取は列国の侵略を誘発すると警告した通りのことが現実となった。近衛は日中経済提携に重点を置く荒尾の同志や門下生の主張を容れて「支那の保全」を会の綱領とした。これを実行する人材養成のために三十三年（一九〇〇）南京同文書院を開設したが、北清事変により上海に移転し、翌年これを吸収して東亜同文書院を設立した。

根津は近衛に会った三十二年より東亜同文会の中心的存在となり、同文書院の院長は二十二年の長きに涉つて務めた。根津は「書院創立要項」の中に、「中外の実学を講じて中日の英才を教え、一にはもつて中国富強の基を立て、一にはもつて中日輯協の根を固む。期するところは、中国を保全して、東亜久安の策を定め、宇内永和の計を立つるにあり。」と述べている。

漢口の樂善堂、日清貿易研究所以来の考えを東亜同文書院が踏襲したものに、学生の中国調査旅行があった。学生を数人ずつのグループに分け、三ヶ月から半年に及ぶ大旅行で、その成果が『支那省別全誌』としてまとめられているが、同文書院の衣鉢を継ぐ愛知大学においてもこの調査旅行が踏襲されている。

（完）